広告

企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

エゾシカ革が現代のハイブリッド素材に

技術で

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。北海道選出の匠、エゾシカ革アルチザンデザイナー・高瀬季里子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

エリア・コンサルティングにて生駒氏と高瀬さん

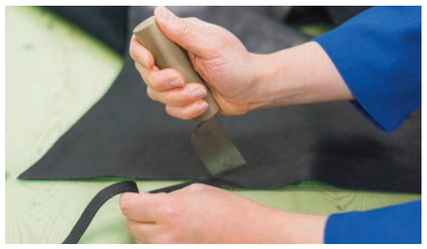
1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

エゾシカに導かれ故郷へ

高瀬さんは札幌生まれ。父親の趣味が狩猟だったこともあり、幼い頃からエゾシカ肉に親しんでいた。東京の美大でデザインを学び、カバン工房で経験を積んだ後、地元でのモノづくりを志し札幌に戻ってきた。当時、エゾシカの急増による農林業被害が大きな問題となっていたことから皮革への興味が高まり、革製品工房「24K」を立ち上げる。薄く軟らかく、それでいて丈夫なエゾシカ革を使用し、これまで数多くの個性的な作品を制作してきた。


繊細さが求められる革包丁での裁断作業

白のなめし革で仕立てたEZOバッグ

「エゾシカ革が取り上げられて嬉しい。新しいものに挑戦する機会を与えられたということはとにかくチャンスだと思う」と、笑顔で語ってくれた高瀬さん。「駆除され捨てられるから安いはずと思われがちだが、流通が確立されていないのでコストが高くリスクも大きい。個体によって質感も全く違う」と取り巻く環境は厳しいが、「この挑戦をきっかけに、ブランドイメージを高め、流通体制の整備につなげたい」と意気込んでいた。

エゾシカ革らしさとは何か

当初のプロダクト案は「究極のエコバッグ」だった。肌触りの良さを生かしながら防水加工をし、強度を加えるためフィルム加工もした。軽さを追求し、小さくたためるようにデザイン。有機的なラインによる立体的なフォルムは、紐を引くと巾着型になる。中に入れる量によって形が変化するというバッグだ。

しかし、10月のエリア・コンサルティングで、アトリエを訪れたサポートメンバーの生駒氏から「もう少し軟らかさを感じられるものがいいのかも」とアドバイスがあった。11月のプレ・プレゼンテーションでは、フィルム加工をしたことにより革が硬くなってしまった点を小山氏から指摘された。二人の共通の感想として、今回の試作品だとエゾシカ革感が薄れてしまうので、エゾシカ革らしい作品にしたほうがいいとのことだった。

新たな北海道ブランドへ

実は、試作品をもう1つ用意していた。ニードル加工のブランケットだ。ニードル加工とは、複数の素材を針で何度も刺して繊維をからめることで一枚の素材にする技法。野生の皮革は、表面に傷やスレなどムラが多く均一でないため、生地（ウール素材）を合わせることで新しい素材となる。ウールの持つ温かさとエゾシカ革の持つしなやかさにより保温性がさらに高まり、それでいて軽く仕上がる。組み合わせる素材と厚みなど、まだまだ調整する部分はあるが、デザイン性と機能性を併せ持つものとなるはずだ。

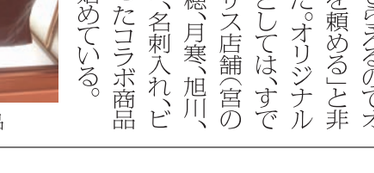
「ブランケットを手にした小山さんがニードル加工に驚かれたのが印象的でした」と語る高瀬さん。「ペンドルトン（アメリカのウールウエア・ブランケットのブランド）を参考にしたらとの助言もあり、エゾシカ革をハリスツイード（スコットランドのツイード生地ブランド）のように地域ブランドとして展開したいと思っていたので、ブランケットで行くことに決めました」。サポートメンバーに背中を押され、ついにコンセプトが固まった。

作品プレゼンする高瀬さん

「地域に根付く産業にしたいので、デザインだけではなく、北海道らしさをふまえた打ち出し方が大事。1月のプレゼンテーションまで時間がないが、いいものを作り上げたい」と熱く語っていた。

「エゾシカ革は保温性に優れ、昔から衣料に用いられていました。その良さを身近に感じてもらえるよう、革の特性を最大限に生かしつつ、新しいハイブリッド素材へと変化させることができました。丸めて持ち運べるように止め具に角をあしらい、革で持ち手も作りました」とプレゼンで語る高瀬さんの表情には自信と充実感がうかがえた。

バイヤーらが次々と高瀬さんのブースを訪れ「地域貢献にもつながるいい活用例」「イメージしていたよりも肌触りがよく軽くて軟らかい」「素材から企画してもらえるのでオリジナル商品を頼める」と非常に好評だった。オリジナル商品への展開としては、すでに道内のレクサス店舗（宮の森、藻岩、東苗穂、月寒、旭川、帯広）でバッグ、名刺入れ、ピアカップといったコラボ商品の展示販売を始めている。


展示販売中のコラボ商品

自然からの恵みを無駄なく生かす

「全国の匠との交流はとても刺激的だったし、要所要所でサポートメンバーからアドバイスをいただけるという心強さから、気持ちを前へ前へと進めることが出来ました」と今回のプロジェクトを振り返る。有害駆除の対象となってしまったエゾシカ。「革を捨てることなく良いものを作り続けることで、北海道にしかないエゾシカ革の価値を高め、地域のブランドとして確立させたい」。生き物からもらった素材を生かし、地域へも貢献していく。マタギの祖父を持つエゾシカ革作家高瀬さんの挑戦はこれからも続いていく。

高瀬 季里子
北海道／エゾシカ革アルチザンデザイナー

1978年札幌生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイルデザイン専攻。エゾシカ革の企画、デザイン、制作まで一貫して行う。2012年に（株）24Kを設立。2010年EZObag、2015年EZO/slashシリーズが札幌スタイルに認証される。「TOKYO DESIGNWEEK 2015」出展。2016年イタリア大使館から、LINEAPELLE（革の見本市）に招待される。

高瀬 季里子／北海道
エゾシカ革アルチザンデザイナー

完成プロダクト「EZO SIKA DEER LEATHER BLANKET」※「MUSEUM STORE」にて展示中
「MUSEUM STORE」（札幌市中央区南3条東2-6）営業時間11:00～19:00（月・第3火休）TEL 011-595-8181

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT